

# 蘇る編集者エミリー・ディキンソン—ファシクル2

## Reviving Emily Dickinson as the Editor of Fascicle 2

中井 紀明 NAKAI, Noriaki

● 桃山学院大学  
St. Andrew's University



ファシクル, 読者反応批評, 死, 時, 信仰

Fascicle, Reader Response Criticism, Death, Time, Belief

### ABSTRACT

Emily Dickinson left almost 1800 poems many of which in bundles later called fascicles; they have been usually regarded as mss of poems chronologically bounded just for preservation. Recently in the United States, however, some scholars find unity in fascicles without clarifying why only their particular fascicles have unity under the editor Dickinson. My hypotheses are Franklin's fascicles are Emily Dickinson's poetry in parts and his "sets" are groups of poems waiting for later inclusion in further fascicles.

My project is to offer the poet a persistent reader taking her fascicles as collections of poems edited by the poet herself and as more than just chronological. My method of reading - thinking - fermenting - writing of/about fascicles was formed by Stanley Fish's Reader Response Criticism and has been the main engine in my analyses of Fascicles 1 and 2 and will take me as far as Fascicle 40.

Fascicle 2 is not just a bundle of poems but an elaborately edited collection of poems, meaningfully following Fascicle 1. In Fascicle 1 Dickinson the editor juxtaposes nature and man in terms of time: nature rotates and overcomes time; man proceeds in a forward direction, dies and never returns. In Fascicle 2 against the softening background of nature are presented big themes like death, time, the human destiny of death and faith in Christ and lastly the poet's almost biographically scrupulous feelings about having faith. Although Fascicle 2 is breathlessly and daringly taking in big themes as the second fascicle in a work of 40, it quite impressively binds these themes and reveals Emily Dickinson as the tactful editor.

エミリー・ディキンソンは 19 世紀半ば (1830 - 1886) のアメリカの女性大詩人であるが、生前はまったくの無名であった。1800 篇近い彼女の詩が残っているが、それらを彼女が「詩集」として意識的に残していたのか。そうではなく彼女はただ個別に 1800 近くの詩群を書き溜め・「保存」してただけで、それらを詩集として編集・出版した一群の人たちが存在したお陰でのみ後世の読者と関係を持てるようになったのか。この点は一世紀以上経った今でも依然として分かっていない。

彼女の詩群がどのように出版されてきたのかはそれ自体面白い研究課題であるが、私が最近特に興味を持っているのが 1981 年にハーバードから R.W.フランクリンの編集で出版された 2 巻本の『エミリー・ディキンソン草稿本』(*The Manuscript Books of Emily Dickinson*) である。この本で私たちはディキンソンが残した原稿 (40 の「ファシクル」と呼ばれるものと 15 の「セット」と呼ばれるもの) をそのまま複写で読むことができる。この「ファシクル」(*fascicle*) という聞きなれない用語を単なる「束」と訳すべきなのか、あるいは「分冊」とすべきなのかは、この 40 の「ファシクル」群をどう考えるかによって違ってくる。「書き溜めて<保存>してただけ」という立場をとるなら「束」と訳すべきであろうし、彼女は溜まった詩群を詩集として「出版」という作業に取り掛かり始めたとする立場をとるなら「分冊」と訳すべきである。編者のフランクリンは前者の立場をとっているが、私は後者が正しいとの立場を徐々に固めつつある。

アメリカの研究者を中心にいくつかのファシクル (例えば 1, 2, 8, 16, 18, 20, 21, 24, 28, 37, 40) に編者ディキンソンの意図性が見られるという指摘が散発的になされてきているが、何故そのファシクルだけが「編集」を思わせるまとまりがあり、他のファシクル群が編集の痕跡を感じさせないのかの説明は奇妙なことにまったくない。ディキンソンの詩は単独で読んだり、研究者の視点によって好きなようにつなげることができるだけでなく、各ファシクルがまとまりを持っていると想定して読んでも意味深く読めるのではないかと

いうのがファシクル 1 と 2 を詳しく検討した後の予感である。詩人・編集者ディキンソンは後世の読者のためにファシクル 1 と 2 を「出版」していたと私は考える。また前述したように他のファシクル群にも詩人・編集者ディキンソンが見え隠れしているようであるから、次のような仮説を立てることができるのではないかと。40 のファシクル群は後世の読者目当てに密かに「出版」された「分冊」詩集群、セットはさらなる分冊詩集への「編集」を待つ待機している詩群ではないだろうか。個々の詩で語るだけでなく詩群の連鎖で語ろうとしたディキンソンをわれわれは見ているのではないかと。個々の詩の「出版」に向けた最終的な「装い」がファシクルではないのか。

これらの仮説が正しいものかどうかを検証するためにまずしなければならないのは各ファシクルに何らかの「まとまり」があるかどうかを考えることである。まずはファシクル 1 から順に読んでいくことが必要であろう。ディキンソンは自身で「詩集」を本格的に編集して、周りの友人「読者」とか同時代の文芸関係者たちのためではなく、後世の読者のためにそれを残していたのではないかと。詩集の出版という通常形で読者を見つけることができなければならぬ、本当の読者を将来にわたってじっくりと選別していこう、そしてその少数の読者の中に生き続けようとする詩人は決意したのではなかったか。彼女の詩群の難しさは詩人の読者選択・振り落としの手段なのではないか。ディキンソンが当時の読者を「見限って」これらの大量の詩群を後世の読者相手に「出版」したつもりだったのなら、私は一連のファシクル研究でその「詩集」全体を一冊の詩集として真摯に読む一人の読者を彼女に捧げたい。個々の詩だけではなく「詩集」という深み・奥行きを探る読者である。そのような読者の読みの体験の中に個を超えた詩集としてのまとまりが現れ出てこないかと期待するからである。その読者に詩人が残したものが「詩集」なのか単なる「束」なのか判断させればよい。私という読者の中を各ファシクルの詩群を通過させた時に各ファシクルは私に詩集としてのまとまりを示してくれるだろうか。

今私がやろうとしているのは「読者反応批評」の実践である。詩人の創作ノートや手紙や日記類などを参照しながらテキストの意図を外から読み込むのではなく、テキストの中に浮遊している作者と「対話・交渉」しながら意味構成の体験を積み重ねていくという試みである。読者反応批評は唯我独尊の好き勝手な読みを目指すのではない。それは、テキストに残っている作者が読者に修辭的な影響力を行使することを認める。作「者」は死ぬが、テキストの中には死なない「作者」が漂っている。読者がテキストを手に取り読み始めるたびにテキストの中で待ちかねたかのように読者を操ろうとする作者である。読者はテキストに漂うこの作者に振り回される。読者は自らの読みを活性化することによって、テキストに浮遊する作者という他者を復元しながら、そしてこの他者と対話・交渉しながらテキストを読み進んでいく。意味とはテキストと読者の出会いから発生する「化学変化」なのだ。複数の物質の出会いが複数の物質の「化学変化」を起す。読者とテキストとの出会いの後に発生する意味は「作者の」意味でも「読者の」意味でもない。テキストの中には「永遠不変」の、「発見」されるのを待っている砂金のような客観的な「宝物」としての作者はいないのである。テキストの「中」の作者は読者の成長・変化によって変貌していく存在である。読者の能力が増すにつれて「見えてくる」作者は絶えず変貌していく。誤解を招きかねない表現を使うと「作者」は読者が作り上げていくようにさえ見える。テキストに客観的に埋まっている作者を読者が「発見」という従来の「読み・解釈」モデルでは、テキストの「新」解釈が絶えず出現するという歴史的事実を説明できないのである。意味が「発見されつくした」、作者探求の読みの体験が不必要になったテキストなど歴史上一つとしてない。読者反応批評を實踐する読者は、「作者の死」などと言うどころか、作者に敬意を込めて、テキストの意味は作者の意味だとさえ言う。読者反応批評家は「著作権」よりももっと深い意味で作者に敬意を表している。読者反応批評を實踐している私にとってはテキストの著作権が切れることは決してない。

各ファシクルは一見するだけでは前人未到の原生林の趣である。ファシクル1とファシクル2を読み終えた私には辿って来たファシクル1とファシクル2の道筋は見えるが、ファシクル3以降の道筋はまったく見えない。通った跡は振り返れるが、前方はそもそも道があるのか、誰かが通ったことがあるのか、まったく分からないのである。時々人が踏み入った形跡があるが、それが「幹線」道路とつながっているのかどうかは判然としない。そもそも「道路」なるものが存在するのかも分からない。とりあえず最初のファシクル1が何らかの意味でまとまっているか根を詰めた作業で検討していて、各ファシクルを順番に論じて論文にまとめていく必要があることに気付いた。論文にまとめようと考え抜くことが、頭の中でそのファシクルと先行するファシクル(群)の詩群を同時に存在させ、そしてそれらが私の頭の中に滞留している間の詩群間の様々な出会いがいわば「発酵」状態をもたらすようなのだ。書くという行為は考えを促進させるが、書こうとすることで「発酵」作用を促進しているようなのだ。一つの詩を読んでいるとふつふつと「意味」が浮き上がってきたり、他の詩とのつながりが自己主張したりする。ファシクルのあちこちで浮き上がってくる意味群が次第にまとまってファシクルの統一的な意味を提示してくる。ファシクルのあちこちで意味が広がって根を張っていくのが感じられるが、ふと上を見上げてみると一つの枝振りのよい木が伸びている。これがファシクル1と2についての考察をほぼ書き終えた偽らざる印象である。

この体験が以後の38のファシクル群にも当てはまるのか、あるいは大方の研究者が考えているようにファシクル群は単に散逸を恐れて年代順に「束ね」保存されていただけなのかはそれぞれのファシクルに入ってみなければ分からない。私これから数年かけてしたいことは、一人の腰の座った読者をデイキンソンに時間をかけて提供し、各ファシクルの詩群との出会いを「発酵」状態にもっていったときに、各ファシクルの何らかのまとまりというか詩人の編集の痕跡が見えてくるかど

うかを全てのファシクルで行うことである。私という一人の読者の読みを記述することによって読みをいっそう活性化するという作業を当面 40 のファシクル全てに順番に繰り返して、40 のファシクル論を積み重ねていくつもりである。本稿はこのプロジェクトの一環をなすものである。テキストを読み・考え・発酵させ・書き上げるという一連の作業の繰り返しを、各ファシクルに詩人の編集の跡が覗えるかの検証をはるかなファシクル 40 まで遂行していくためのエンジンにする心算である。

ファシクル 1 に編集者としてのディキンソンが覗えるかについて私は最近書き終えた。（「蘇る編集者エミリー・ディキンソン—ファシクル 1」『表象と生のはざままで—葛藤する米英文学』近刊 南雲堂）ファシクル 1 では「自然における死」と人間の「死」の対比がまず行われたと私は総括した。ファシクル 1 の読解の終了そしてファシクル 1 論執筆の終了とともにファシクル 2 へのさまざまな期待が浮かんできた。私という読者の中には、対比が行われた以上ファシクル 2 では自然か人間かどちらかに特化しながらそれぞれの「死」の意味を深化していくのか、それともさらにその「対比」自体を深化・展開するのか、編集者ディキンソンはどのようにこのファシクル 2 では編集の技を見せてくれるのかといった期待、そしてまた一方で「仮説」として控えめに「対比」を編集者ディキンソンに託してみたが、その仮説は本当に編集者・詩人につながっていくのか、私のでっち上げ・歪曲ではないのかという不安も浮かんでいた。しかし実際にファシクル 2 の 24 の詩とファシクル 1 の詩群を発酵状態に持っていくと、ファシクル 1 からファシクル 2 への自然なつながり・継続とファシクル 2 の鮮やかなまとまりが浮かび上がってきている。

ファシクル 1 の問題意識を継続し、それに重ね合わせ・深化・展開するように執拗な考察がファシクル 2 で繰り返し広げられる。ファシクル 1 における自然と人間の対比に続けて、ファシクル 2 では自然が背後に退き人間が前面に出てきている。（以下で [ ] はファシクル 2 内部での順番、真ん中の数字はジョンソン版、( ) 内の数字はフランクリン

版の数字である。）「死」（[ 1 ] 8 (42), [ 2 ] 9 (43), [ 7 ] 39 (50), [ 9 ] 147 (52), [ 13 ] 57 (55), [ 20 ] 45 (62), [ 21 ] 46 (63)), 「死」をもたらす「時」（[ 1 ], [ 13 ], [ 14 ] 1729 (56), [ 16 ] 42 (58), [ 19 ] 10 (61), [ 20 ] ）そしていつの日にか必ず死ななければならないという人間の「運命」に対する恐れ・不安（[ 1 ], [ 2 ], [ 7 ], [ 13 ], [ 16 ], [ 20 ], [ 21 ], [ 23 ] 48 (65)), そしてそれらを和らげるために人間が作り出した宗教・信仰、そして信仰に踏み切れない詩人自身（[ 6 ] 38 (47), [ 8 ] 40 (51), [ 9 ], [ 13 ] 57 (55), [ 17 ] 43 (59), [ 18 ] 44 (60), [ 22 ] 47 (64), [ 23 ] ）といった大きな主題が、自然を詩の中に抱えて、あるいは自然を扱った詩群（[ 2 ], [ 3 ] 15 (44), [ 4 ] 36 (45), [ 5 ] 37 (46), [ 10 ] 56 (53), [ 11 ] 14 (5), [ 12 ] 1730 (54), [ 15 ] 41 (57), [ 18 ], [ 24 ] 17 (66)）が息抜き・緩衝材として散りばめられる文脈の中で、提出される。ファシクル 1 で詠嘆をこめて語られた気楽な (easy) 自然に対比して、ファシクル 2 では複雑な人間存在が語られているのである。

まず大きな主題である「死」がいかにこのファシクルで提示されているかから見ていこう。それはいきなり冒頭から提示される。

[ 1 ]

There is a word  
Which bears a sword  
Can pierce an armed man –  
It hurls it's barbed syllables  
And is mute again –  
But where it fell  
The saved will tell  
On patriotic day,  
Some epauletted Brother  
Gave his breath away.

Wherever runs the breathless sun –  
Wherever roams the day –  
There is it's noiseless onset –  
There is it's victory!  
Behold the keenest marksman!

The most accomplished shot!  
Time's sublimest target  
Is a soul "forgot!"

1行目の強力な刀を携えた「ある言葉(a word)」とは何であろうか。2行目の最後の「sword」は1行目の「word」と視覚的な「韻」を踏んでいるが、「word」ではない、「武器」(「sword」)なのである。「ことば」であり軍人をも刺し貫く「刀」であるものとは何だろうか。4行目の「それ(it)」は「ある言葉(a word)」を指すが、引き抜くことの難しい針のついた(barbed)音節とは具体的になんだろうか。それがその音節を浴びせるとはどのような行為を言うのだろうか。その言葉に刺殺されるのが軍人なのはなぜだろうか。二節の最後まで読んで結論的に言うならば、「それ」とは「死」である。「死」とは刀であり針であり「殺傷」道具なのである。「死」はいったん突き刺さったら引き抜くことの難しい針(「barb」)で人間に取り付き目的を達成する。人間の中でも最も強い軍人(「epauletted」「an armed man」)でさえもこの「死」に勝つことはできない。この針とは病気のことである。19世紀前半の病名としてはScarlatina, Pleurisy, Emphysema, Pneumonia, Cholera, Typhoid Feverなどがあるが、これらは全て複数音節の語であることに注目しよう。「太陽」も「日」もこの死を免れることができない。一日走り回って疲れて息も絶え絶えになって夕方になり夜という死を迎える。どこを「日」が走っていようが、必ず夜という死が勝利する。太陽が沈んで必ず一日は終わるからである。しかしファシクル1で見たように、聞くのも見るのも恐ろしげな仰々しい病名によって殺される人間の「死」は自然の「死」とは違っている。陽はまた昇るのであるし、日もまた然りである。自然には「循環」が許されているが、人間に与えられるのは一回限りの生と永遠の死である。死はときに戯れる。しかし「循環する自然」の死はもて遊びでよからうが、死の究極的である人間の魂にとっては一回きりの生をもて遊ばれて終結されたのではたまったものではない。「死」は殺傷道具そのものであるというのに、

さらに「時」という「射手」(marksman)を雇う。「時」は「死」の指示によって自然に対しても人間に対しても「終結」を宣言する。

次の詩を読んでみよう。

[2]

Through lane it lay - thro' bramble -  
Through clearing and thro wood -  
Banditti often passed us  
Upon the lonely road.

The wolf came peering curious -  
The Owl looked puzzled down -  
The serpent's satin figure  
Glid stealthily along,

The tempests touched our garments -  
The lightning' poinards gleamed -  
Fierce from the Crag above us  
The hungry Vulture screamed -

The satyrs fingers beckoned -  
The valley murmured "Come" -  
These were the mates -  
This was the road

These children fluttered home.

ディキンソンの多くの詩の冒頭で唐突に代名詞(it や she)が出てきて読者を当惑させている。最初の行にいきなり出てくる代名詞「it」は何を指すのだろうか。この詩が[1]に続いているのはディキンソンの意図であると考えことから一つの解釈が可能になる。ディキンソンには、書き溜めていた詩群を編集しながらそれらに触発されて新しい詩群を「詩集」に追加していた可能性がある。[1]を読み返しながらかこの[2]を続けて読んでいこうとするなら、冒頭の「it」はごく自然に「死」を指すことになるだろう。自然の権化のような奥深い森の背後に潜んでいるように見えるものが、人生の暗闇の中に潜んでわれわれを待ち受けているように見える「死」とだぶってくるように見えるとこ

の詩は語るのだ。子供たちが奥深い森に恐れをなして逃げ帰るのは、人生にいつ死が訪れるかも知れぬと大人が恐れおののいているのと軌を一にしているのである。

次の詩も死と時を扱ったものである。

[13]

To venerate the simple days  
Which lead the seasons by –  
Needs but to remember  
That from you or I,  
They may take the trifle  
Termed *mortality*!

To invest existence with a stately air –  
Needs but to remember  
That the Acorn there  
Is the egg of forests  
For the upper Air!

ファシクル 1 の問題意識が続いている。日々が淡々と過ぎ行く中で、この死すべき運命にある人間の肉体は日ごとに老化し朽ちていき死に近づいている。時の経過は死への接近である。自然は循環しているがゆえに死を意識せずに生を享受している。しかし人間は死をさまざまに美化して手懐けようとしながらも、依然としてそれを意識しその存在に恐れおののいている。人間の存在は単独で考えてみると堂々たる存在だとはとても思えない。この世のどنگりは天上の森をも生み出すものだと思い込んで初めて、この世は堂々たる存在に見え出してくるにすぎない。平穩に過ぎていく単調な日々が人間の死すべき運命を実は如実に語っているが、循環しているがゆえに完全だと思えた自然も堂々さを持たせようとすれば「天国」を持ち込まなければならない。われわれの存在は「天国」という観念（信仰）を持ち込まない限り堂々たる様・雰囲気は持ち得ない不完全なものである。

次の詩では死と隣り合わせの生を見せ付けられた人間が必死に自らの生を守ろうとし生への執着を見せている。

[21]

I keep my pledge.  
I was not called –  
Death did not notice me.  
I bring my Rose.  
I plight again,  
By every sainted Bee –  
By Daisy called from hillside –  
by Bobolink from lane.  
Blossom and I –  
Her oath, and mine –  
Will surely come again.

この詩を分析する前にまずこの詩の「文脈」としての [20] を読んでみなければならない。この詩は [1] から [2] の流れのようにディキンソンが編集しながら新たな詩を書き足していることを示していると考えられる。[21] は [20] が書かれた後に [20] に触発されて書かれたものと推測してよからう。まず [20] である。

[20]

There's something quieter than sleep  
Within this inner room!  
It wears a sprig upon its breast –  
And will not tell its name.  
Some touch it, and some kiss it –  
Some chafe its idle hand –  
It has a simple gravity  
I do not understand!  
I would not weep if I were they –  
How rude in one to sob!  
Might scare the quiet fairy  
Back to her native wood!  
While simple-hearted neighbors  
Chat of the "Early dead" –  
We – prone to periphrasis  
Remark that Birds have fled!

ここにはファシクル 1 と 2 を通じて初めて人間

の死者が登場してくる。(ファシクル2には[7], [10], [14]と自分が死ぬことを想像している詩群がある。)死者が安置されている部屋であろうか。人間が死ぬということの意味の探求を人間はする。死ぬことがどのようなことなのかなかなか分からない人間は「鳥が飛び立つこと」だとまず説明する。しかし考えてみるがよい。(20)の召された人と[21]の生き延びた私との違いは何なのか。死が時を雇って気ままにしかし決して忘れることなく他音節語を人間に投げかけているのはすでに[1]で知らされている。射られる側の人間は射られた人間を目の当たりにして(20)改めて自分の存在が死の手のひらの中の舞に過ぎないことを思い知らされる。神に対してなされた誓いをきちんと守ったから私は召されなかった。死が私に目をつけなかったことに感謝の気持ちを表すために私はバラを供え再度の誓いを行う。私は生き延びるために何度でも宣誓をする。殉教者([6])として嬉々として天に召されるよりも、この地上で生き延びることがこの「私」の価値観に合う。神とか天国を持ち出してこなければ単独ではなんともしがたい、死に彩られたこの地上での人間の生を守るために、私は思いつく限りの身の回りのもの(聖なる蜂、ヒナギク、コメクイドリ)を捧げて神の意に沿って生きることを将来にわたって誓うのだ。

しかし次の詩が示しているように、生きるということは暗闇の中を進むことだ。「時」は「死」が雇った射手である。(1と14に矢が出てきている。)ときに「時」は楽しみとか愛とか喜びとかをもたらすことがあり、思わず人間はその送り手を賛美してしまうが(14),「時」の本職は「死」をもたらすことだ。死の射手が未来のどの時点で私たちに襲ってくるのかはもちろん、未来に何が私たちを待ち受けているのか、それは運命なのか偶然なのか私たちはまったく知らない。未来は一寸先も私たちには見えないという意味で生は死に彩られて暗闇の中を進んでいくのである。私は呼ばれなかった・召されなかったといつまで言えるのかはまったく分からない。

[19]

My wheel is in the dark!  
I cannot see a spoke  
Yet know its dripping feet  
Go round and round.  
My foot is on the Tide!  
An unfrequented road –  
Yet have all roads  
A clearing at the end –  
Some have resigned the Loom –  
Some in the busy tomb  
Find quaint employ –  
Some with new – stately feet –  
Pass royal through the gate –  
Flinging the problem back  
At you and I!

“wheel”ということばはファシクル1の四季の循環の輪を思い出させる。ここの「輪」はむやみやたらに早く回転する「時」そのものだが、人間に未来を予測させることなどない。四季循環の安定性と大変な違いなのだ。時の進行は人間にとってはいつも死へのさらなる接近なのだから、人間が生きていくということは絶望的な状況の中においてなのである。このような状況を鑑みてファシクル2の「私」は人間全体の運命とか人間が生きている世界・地球全体(次の詩の「a common ball as this」)を視野に置いた発言が目立っている。全人類のために、地球全体のために死への考察、人間存在の考察をするという気負い、勇気、挑戦みたいなものがこのファシクルには見られる。

最後の定冠詞付きの「問題」(「the problem」)とは何だろうか。人間存在にまつわる問題だと私は考えたい。このファシクルで使われている用語と比喩を使うなら、例えば、四季が巡回ししかも意識がなく冬という死を恐れようがない自然が一方でこの同じ地上にありながら、なぜ人間は死によって終止符を打たれ、しかもそれを絶えず意識し恐れおののくようにされているのだろうか。なぜ人間だけが死を生を限定するもの、またときには否定するものとして意識しなければならないのか。生の一回性をもたらししている死の恐怖におの

のきながら何故生を補足するものとしての、生の価値を限定するものとしての、天国をこの地上に持ち込まなければならないのか。ファシクル1と2の中を連綿と続いている強迫観念を使えば、なぜ天国の方を見てこの世を生きなければならないのか。地上の存在に天国を持ち込まざるを得ないこと、つまり地上が不完全なものとして存在していることに、生が死によって限定されていることと並んで詩人は満足できないでいることがこのファシクル2で徐々に明らかになる。

次の詩も同じく時とか死を扱ったものであるが、このファシクルのもう一つの重要なテーマである「信仰への躊躇」という問題が出てきている。

16

A Day! Help! Help!  
Another Day!  
Your prayers, Oh Passer by!  
From such a common ball as this  
Might date a Victory!  
From marshallings as simple  
The flags of nations swang.  
Steady – my soul! What issues  
Opon thine arrow hang!

ここにも矢が出てきている。13の単純な日々がまた繰り返されてまた一步棺桶に近づいていく。人間存在への詩人の地球規模の、度量の大きい考察がここに見られることは前述した。ここで注目しなければならないもう一つ重要な点は3行目の「Your prayers」の句である。何故「私の」ではなくて「Your」なのだろうか。

見てきたようにこのファシクルは「死」が人間存在をいつでも終結できるということを刃物や武器のイメージ（1の sword や barb, 2の poinards, (poniards の誤りか) 14と 16の arrow) を使って印象付けている。この死を意識して9のように死と「戦う」という意思を表明するのも人間の一つの態度である。人間が勝利(16)するかもしれないから安易に白旗を掲げてはいけない。

しかし死に怯えている人間にとって戦うことよ

りもっと頼りになることは、この「地上」の存在を「天国」という考えで補うことであり、天国を信ずること(信仰)である。ファシクル2で興味深いのは、地上への執着と信仰に踏み切れない悲しみ・苦しみが天国への言及・信仰と、混ざり合って出てきていることである。この私は安易に「私の」祈りとは言えないのである。

この信仰の問題に関して極めて重要な次の詩を読んで見よう。

8

When I count the seeds  
That are sown beneath –  
To bloom so, bye and bye –

When I con the people  
Lain so low –  
To be received as high –

When I believe the garden  
Mortal shall not see –  
Pick by faith it's blossom  
And avoid it's Bee,  
I can spare this summer - unreluctantly.

不承不承ではなく(「unreluctantly」という奥歯に物が挟まったような最後の言い方に注目しよう)夏を容赦することができる時・理由が三つあるとこの詩は語る。(1)種を育て上げる自然の力を確信できる時(2)死んで埋められた人たちが高いところに受け入れられると思込める時(3)天国の楽園が信仰を基準にその花を選び取り、蜂(信仰に絡んでごちゃごちゃ言う私)を拒絶した時(つまり私はまだ死ななくてすんでいる。)死んだ人は「天国」とか「楽園」へ行って欲しいが、生きている私はこの地上に留まる方がよい。私は信仰がなかったから召されなかった。天国よりこの地を愛する私は信仰の欠如のゆえにこの地に捨て置かれるほうがかえって良かったのではないか。召され



たことを嬉々として受け入れこの世をあの世のために捨てていく、自分を捧げる（「offer」）ことのできる殉教者群像は信仰に逡巡している「私」には時に羨ましく思えてくることもある。（[6]）しかしどうしても「私」は召されることを喜ぶ殉教者にはなれない。召された者と召されなかった「私」との紙一重の差、この差の中に人間存在の厳然たる枠組みを思い知らされる「私」、それを知らされながらその枠組みを克服するかもしれない信仰に「私」は入りきれない。文句ばかり言って信仰がないと天国から拒絶された蜂と召された者を前にむしろ召されなかったことをよしとする「私」は天国よりも地上をよしとして地上へ執着するのである。

しかし暴君である死によって縁取られ彩られているこの世を信仰なしでどうやって生きていけるというのか。

[22]

Heart! We will forget him!  
You and I – tonight!  
You may forget the warmth he gave –  
I will forget the light!  
When you have done, pray tell me  
That I may straight begin!  
Haste! lest while you're lagging  
I remember him!

これは一人の人間の中での信仰にまつわる葛藤を描いたものである。この寒々としたこの世を生きぬくための励ましとなる「暖かみ」と、暗闇のこの世を安全に進んでいくための「光」をキリストが与えてくれる。キリストの愛がもたらす温かみを忘れられない「心」に彼への信仰を忘れようと私（私の中の理性とか知性と呼ばれる部分）が、この世に執着したいがためであろうか、呼びかけている。しかしながら愛の温もりを心はずぐには思い切ることはできないであろうことは予測できるし、私も光なしでこの世の暗闇を進んでいくことにはためらいを覚えざるを得ない。信仰なしで生きていくことができるかもしれない。しかしそ

の試みは途轍もない無謀な試みなのかもしれない。彼への信仰なしでこの世を生き抜くというのはきわめて威勢のよい態度であるが、逡巡せざるを得ないめくらめく生き方なのであろうか。死に誘い、死を象徴する海の上で、生を象徴する大地を捜し求める鳩（[23]）。この鳩は人間存在の絶望的な枠組み・条件の中で生の可能性を希求する人間の象徴であろう。この鳩は信仰に導かれて陸地を探し当てたのだろうか。

以上このファシクルの重要な詩群を取り上げてこのファシクルに編集の痕が覗えるかを見てきたが、このような詩群がこのファシクルにたまたま並べられたとは私にはとても考えられない。明らかに詩人のディキンソンは編集者としてファシクル1と2を意味深く繋げてきている。不思議なことはファシクル1にしても2にしても論文を書き始めるまではこのような纏まりはまったく見えなかったことである。次にファシクル3を検討しようと今その詩群を読んでいるが、1と2についての書きはじめた時と同じく、纏まりなどはまったく見えない。ファシクル群を順番に読んでいくという作業は次々に前のファシクルの詩群を読み直すことを要求してきている。そしてそのたびに詩群の解釈のための新たな「文脈」が見えてきたりする。ファシクル群の相当先まで行ったら事情が変わるのかどうか分らないが、ファシクルの1と2だけで思いのほか時間がかかっている。これからファシクル3に踏み入って、読む・考える・発酵させる・書くというエンジンを始動させなければならぬ。

ファシクル1と2について書き終えた段階で言えることはファシクルのペースが非常に速いということである。1で自然と人間の対比が行われたのは順当だと分るのだが、2では一気に信仰、しかもそれがなかなかもてないという詩人の伝記的な事実に合致する点にまで踏み込んできている。このようなすさまじい速度ではるか40までさらにどのような主題をどう配置していくのだろうかと思うほどの速度である。自然の扱いにしても、もう少し先のファシクルまで進んでから、ファシクルが進むにつれて微妙な変化が起っているか詳細に検

討して見なければならぬ。

本稿は注がまったくないし「学術論文」の体をなしていないという印象を与えるかもしれない。内外の膨大な研究者の助けをあまり借りていない不遜な研究かもしれない。全てのファシクルを全て「研究」した後に「整理」して私の「見解」をまとめたほうが「学術論文」としての体をなすのではないだろうか。このような考えは当然思いつくことで、私も多くのディキンソン研究者と同じくこの「総括」作業をまずしたのだった。しかし大方の研究者の考えたように、ファシクル 40 全体を見渡すだけでは混沌そのもの、ただ時代順に一定の量を「束」にしたものとしか見えてこなかった。今まず必要なのはディキンソンの残した 40 の「束」に読みに集中した真摯な読者を提供することであり、ディキンソン研究を総括することではない。もし彼女が後世の読者に「出版」していたと確信がもてるようなら、「束」から「詩集」へ格上げする必要がある。しばしば極めて難解であるディキンソンの詩群を読んでいて参考文献の渉獵に走らなければと不安になることが頻繁に起っているが、必要があれば、予想されるこの「言語的」そして「文化的」な私の誤読を覚悟の上で、まず 40 の束を「詩集」にしなければならぬ。他の読者の洞察からも学ぶべきことは言うまでもないが、今はまずディキンソンの書き残した詩群の「連鎖」の文脈からこそ学ぶべきだと私は考えるのだ。

さらに参考文献のなさについて言い分けさせていただけるなら、もう一つここで書かなければならぬことがある。往々にして日本のディキンソン研究者の論文は自らの考察の少なさをアメリカの研究者の論考の紹介でカバーしようとしているように見えるときがある。読むという行為は作者と読者の共同作業であるが、この作者は一見非協力的で読みの場になかなか顔を見せないのである。全て読者がカバーしなければならない。日本の多くの研究者はこのような重要な任務を帯びている「読者」を「作者」に提供できないでいる。自らのかけがえのない読者を抹殺して本国アメリカの読者群を義理堅く紹介するのに多くのページを割いている。私のファシクル研究は他の読者ではなく

テキストの中の作者の助けを借りて作品の意図をあぶりだそうとする一日本人読者の試みである。